

開 一夫
(Hiraki Kazuo)



東京大学教授

工学博士。1963年富山県生まれ。東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻 教授。(旧)通産省電子技術総合研究所主任研究員を経て、2000年より東京大学に勤務。乳幼児の心理や行動、脳の発達過程について科学的にアプローチする「赤ちゃん学」を研究。大学では「情報」や「発達科学」を教えている。

日本赤ちゃん学会常任理事。日本子ども学会常任理事。日本学術会議連携会員。主な著書・編書に『母性と社会性の起源』(岩波講座：コミュニケーションの認知科学 3巻)、『赤ちゃんの不思議』(岩波書店)、『日曜ピアジェ 赤ちゃん学のすすめ』(岩波書店)、『ソーシャルブレインズ-自己と他者を認知する脳』(東大出版)など。

ペダゴジカル・マシン-「教える」こと「教えられる」ことの発達認知科学

赤ちゃんには、非常に強力な学習能力が備わっています。赤ちゃんがもつ学習能力には大きく分けて2種類あります。1つは、外界の事物・出来事に潜む構造を独力で発見するための「教師なし学習(unsupervised learning)」の能力、もう1つは「他者」に「教えられる」ことを前提とした「教師あり学習(supervised learning)」の能力です。一見、前者の方が難しいように思えますが、実は後者の「教師あり学習」のための能力は人間だけがもつ特異的な能力です。人間は、「教える」ことができる唯一の動物だと言われています。よって、「教えられる」ことができるのも人間だけかもしれません。

この講演では、乳幼児と大人がもつ「教え・教えられる」ための能力について、最新の研究成果を紹介しながらお話しします。特に、ここ数年我々が取り組んでいる「教え・教えられる」人工物(ペダゴジカル・マシン)開発のための研究手法について紹介します。具体的には、「今性(newness)」と「応答性(responsiveness)」に着目して行っている乳幼児を対象にした実験研究について紹介します。